

タンデムラーニングプロジェクトの歩みと課題

ふじたに ひろき
藤谷 悠

(政策・メディア研究科後期博士課程3年)

1 タンデムラーニングプロジェクトとは何か

タンデムラーニング（以下「タンデム」とする）とは、外国語の学習者同士が互いの母語と学習言語を交換して行う相互学習活動である。筆者は、メディアセンターフレンズ（湘南藤沢メディアセンターで開催する企画を立案・運営する学生主体の組織。以下「MCF」とする）の企画として、湘南藤沢キャンパスでタンデムのプロジェクトを展開している。

慶應義塾大学では他キャンパスも含め留学生支援活動が様々な展開されているが、タンデムは一方的に行われる支援活動ではなく、相互に助け合う活動である点にその特徴がある。例えば、フランス語を学習する日本人学生と日本語を学習するフランス人留学生とのタンデムの場合、ある時は日本人学生が留学生からフランス語を学びつつも、また別の場面では留学生に日本語を教える側に回るという具合に、流動的に教える/教わる側が入れ替わる構造を持っている。言うなれば、「半学半教」の関係を結ぶことになるのである。このような関係性の中では、両者の上下・強弱の関係は固定されることなく、お互いが助け合う・学び合う関係が構築されることになる。

そうした特徴を持つタンデムにおいては、常に目の前にいる個別で具体的な他者との交流が活動の核となる。その実践の手法は様々で、生身の対面式で行うこともあれば、オンライン上で行う形式もある。また、いわゆるスタンダードな学習法に沿う形、つまり文章の読み書きや会話もあれば、それとは全く異なる形、例えば共に映像制作や写真撮影のアクティビティを行うなどのユニークな形もある（それらはプロジェクトで実践された）。

タンデムの活動それ自体は、外国語の機能的能力の向上が主な動機・目的となる。だがその活動を通じて、他者といかに交流するか・関わるかということ副次的に、かつ必然的に学ぶことになる。タンデムを通じて出会うまで未知の相手同士、そして話す言語も育った文化も異なる両者は、お互いに模索しながら関係を構築していく。その過程では、すれ

違うことも多く、わかりあえない部分が強調される場面もあるだろう。筆者自身も過去にタンデムを実践していたが、その時も「パートナーとスムーズに交友が深まった」などということは決してなかった。パートナーの主張の強さに苛立ちを感じたり、自分の表層的な振る舞いが相手を不快にさせたりもした。初めから相性の良い相手と偶然出会えればそれは幸運なことであろうが、どれほど近い関係の中にも決してわかりあえない部分はある。そうしたもどかしさを抱えながら、それでもお互いの言葉を重ねて関係をより合わせていく。タンデムをプロジェクトとして広く展開することは、そのような学生間のリアリティのある異文化交流の実践を通じて、キャンパス内における多文化の混交が「絵に描いた餅」ではなく実際性を伴ったものとして浸透する一助となっているのではないかと考えている。

2 プロジェクトのこれまでとこれから

タンデムプロジェクトは、今ではキャンパス内の日本人学生と留学生をつなぐ「ハブ」として、異文化交流のインフラの一つの役割を担っていると考えられるが、プロジェクトには様々な課題も残されている。

2016年から始まったこのプロジェクトは、2020年で5年目を迎える。毎学期初めに行われるメディアセンターガイダンスやポスター（図1）掲示による告知、またタンデムについての説明会（図1）を開催することで、随時参加を募っている。参加を希望する学生には所定の必要事項（学習言語、母語、その他の使用可能な言語など）を添えて応募してもらい、筆者をはじめMCFのメンバーがその情報を元にパートナーとのマッチングを行っている。



図1 タンデムの募集ポスター（左）と説明会（右）

年度別の応募者数と実際にパートナーと活動できた参加者数は、表1のとおりである。このデータを見ると、応募はしたもののマッチングが実現せず、活動できなかった学生も一定数いることがわかる。

表1 応募者と参加者 (単位:人)

		2016	2017	2018	2019
応募者	日本人	41	41	15	20
	留学生	30	28	20	26
参加者	日本人	18	22	14	18
	留学生	20	21	13	18

その原因の一つとして、応募者の言語状況の偏りが挙げられる。表2は、マッチングが実現した日本人学生の学習パートナーが使用する言語のデータである。

表2 日本人学生のパートナーの言語 (単位:人)

	2016	2017	2018	2019
英語	9	9	6	13
中国語	7	7	1	0
朝鮮語	2	0	2	3
インドネシア語	0	3	1	0
フランス語	2	2	3	1
スペイン語	0	0	1	0
アラビア語	0	1	0	1

留学生のほとんどは日本語の学習を希望するため、その相手となる日本人学生の希望学習言語にパートナーの有無が左右されるのが、マッチングの現状である。つまり、表2のデータで英語を用いるパートナーの数が突出しているのは、日本人学生の多くが英語の学習パートナーを望んだ結果である。逆に言えば、日本人学生が希望しない言語を母語とする留学生たちはマッチングされにくい傾向となっている。また、マッチングが成立した言語は、湘南藤沢キャンパス内で授業が開講されている言語に限られていることもわかる。その他の言語を母語として持つ留学生たちをいかにケアするかは課題の一つであろう。現在までの対応としては、英語を希望する日本人学生の多さを考慮し、母語でなくとも流暢に英語を扱うことができる留学生たちには英語でのマッチングを勧めている。その際には、日本人学生の側にも相手が英語のネイティブではないことを伝

えて、彼らとのマッチングを希望するかどうかの意思確認をしている。ただし、それらのマッチングは本来のタンデムにおける「母語と学習言語の交換」という重要な構造を崩してしまうものであり、パートナー間の対等な相互関係を厳密に考えるのであれば、あくまでもイレギュラーなものとしてとらえなければならぬであろう。

また、プロジェクト運営者であるMCFがマッチング後の参加者たちといかに関わるかという点も、課題の一つである。これまでは、参加者の自律的な学習や学びの自由度の高さを重んじるために、マッチングを行った後は、MCFは活動に積極的に関わらないことを意識していた。しかし、参加者に行った調査の結果、活動に至る以前の段階でパートナーとの関係構築に苦慮するケースもあることがわかった。さらに、たとえ活動に至ったとしても、それを継続する難しさを感じる学生もいた。そうした点において、「活動が軌道に乗るまでのエンパワーメント」など、MCFの関わり方には別の側面もあるのではないかと考えている。

以上を鑑みて、今後はプロジェクト自体をコミュニティとしての機能を備えるものへと変えていくことを構想している。そうすることで、参加者同士、あるいはこれから参加を考えている学生、また運営者であるMCFにとっても、それぞれの情報交換を行うことができ、またお互いに「タンデムの知」を学ぶ場を作ることができるのではないかと展望している。

「人間という生身のメディア」が交流するタンデムという活動を広めるこのプロジェクト自体もまた「生き物」だと感じている。既存のタンデムの様子を尊重しつつ、MCF独自の形も柔軟に探りながら、5年目という節目を超えて、これからもプロジェクトを継続することが重要であろうと考えている。

参考文献

- 1) 仁科陽江. タンデム学習の実態と対策: 成功する自律相互学習のために. 日本語教育連絡会議論文集. 2011, no.23, p.80-90.
- 2) 脇坂真彩子. 対面式タンデム学習の互惠性が学習者オートノミーを高めるプロセス: 日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ. 阪大日本語研究. 2012, no.24, p.75-102.